

日本の木造架構史

第9回

近世の茶室

増田一眞 | (株) 増田建築構造事務所 代表取締役



茶室とは、茶の湯を行う部屋とその建物・庭を指す。その建物は「数寄屋」と呼ばれ、「露地」とよぶ庭を伴っている[写真1]。建物と庭は分かち難く結びついており、「数寄屋造り」とよばれる。

「数寄屋造り」では、柱や梁の角は面皮付きであり、礎石は自然石を用いる。屋根は草葺きか柿葺き、檜皮葺きが多い。壁は聚楽土と呼ばれる茶色がかった壁土が好まれる。窓は下地窓や連子窓で、小さくいくつも付けられる。縁側など取り付けられることなく、入口なども「躡口」とよぶ、極めて小さな入口で板の引戸である。織部口とよばれる紙障子立てのものもあるが、頭より少し低い高さである。

天井も一部に屋根裏を表し、「駈込天井」とよび、天窓が切られることがある。それを「突上窓」という。

畳は「大目畳」（「台目畳」とよぶ、半畳より大きい3/4のものが使われることもあり、地板が畳の間に入ることもある。多くは四畳半敷を基にしているが、それより小さい間が多く、それを「小間」とよび、それより大きいものを「広間」という。小間は一畳半とよぶ一畳と大目畳のものが最も小さく、二畳・三畳・四畳、また地板をその間に入れたもの、半畳を添えたものなどがある。この中の一つに炉が切られ、茶を点てる型から左勝手（本勝手）、右勝手（逆勝手）に分かれる。茶を点てる畳の隅に切った炉を隅炉といい、客付きのほうに切ったのは向炉や向う切りとよぶ。また、壁から離れて柱が立てられ、それを中柱という。多くは曲がった丸太が使われるため、曲柱ともよばれる。その柱が炉の隅にくるように切ったものを出炉や大目切りとよび、その炉が茶を点てる畳の内に入ったものは向切りとなる。

畳にも名がつけられており、四畳半でいうと踏込畳、茶立畳、炉畳、貴人畳、客畳、などがある。

茶室には釣棚がつくれ、また道庫棚も付けられ、茶会の折には道具が飾られて、極めて目を引く見所となる。

茶室はこれらのものが相まって一つの空間構成をなし、見るものの目をとらえるのである。

東求堂と待庵

銀閣寺の東求堂同仁齋（京都府京都市）

銀閣寺は足利義政の東山殿を寺にしたもので、その東山殿がつけられ始めたのは、文明14(1482)年であった。今残っているのは東求堂とよぶ持仏堂と観音殿だけである[写真2]。この東求堂の東北隅に付書院と棚を持ち、炉が切られた四畳半がつくれ、同仁齋の額が掛けられた。

文明18(1486)年正月になって「御持仏堂（東求堂）は半作……」（蔭涼軒目録）と書き残されていたが、3月12日に同仁齋の名が定まったことが伝えられていた。

この四畳半について近頃茶室ではないとする説があったが、後の茶室とは違って、これらの道具から推して茶が飲まれたことは否めないであろう。同仁齋の炉と茶入れや茶碗が飾ってあった違棚との隔たりは今の点て手前からは考え及ばないが、相阿弥や珠光の手前の中には、茶入れや茶碗を飾った棚を、床の間に据え、茶を点てる際に下ろし、点て終わってからまた床に戻す手前があった。これは「相阿弥花伝書」に図入りで細かく伝えていたが、珠光のは「不住庵数寄屋飾之制」に出ていた。後には紹鷗や利休の書にも出ていた。足利將軍家の持仏堂は前々から仕来りであったらしく、義教の室町殿「安仁齋」にも同じような間取りで、また義持の三条殿「安仁齋」から筋を引いてきて、ともに仏像と祖先の位牌を祭り、書院を付けて自ら身を修め行をするところとしたらしかった。義政は隣の部屋に夢窓の墨蹟をかけ、禅僧の書斎のごとくにして、自ら茶を点てることがなかったとは言えないであろう。

庭も夢窓がつくった西芳寺の池に倣って、池に船を浮かべる考えで、舟屋形の額を祖国寺の僧に言いつけていることが目録に誌されている。東求堂東寄りの山裾、一段上の湧水のところは、元の「漱蘚亭」の庭と考えられる[写真3]。ここから二畳敷で茶湯棚があ



写真1 菅田庵の露地



写真2 銀閣寺 東求堂



写真3 銀閣寺 漱石亭の石組

る「西指庵」に続くのである。この湧水の周りはこの庭の中心をなすもので、石も大きく、力強く表れている。この山懐の空間を一つのまとまりあるものに統べるに足る表現を持っている。突き当りの土留をなす石は高さ1.5m余りであり、両脇手前の添石も高さ90cmはある。これは、山裾へ流れくる水を湧水になるように組まれたもので、水の周りは30cm余りの高さの石7個で、七角形に固く組まれている。そして正面へ余り水を流しているのである。この姿は、後の茶室付きの蹲踞手水鉢つくばいちょうずばちの原型をなしているように考えられる。この水は扁平な石を組み合わせ、粘土で巻いた暗渠で下の段の「御茶の水」に通っていたらしい。

妙喜庵の待庵(京都府大山崎町)

妙喜庵の待庵は、千利休の茶室と言いつたものに出会わない。利休の亡くなった15年目の慶長11(1606)年に、片桐且元が豊臣秀頼の言付で山崎宝積寺を改めつくったときに描かれた絵図に、今の妙喜庵のあるあたりに、「妙喜庵かこひ、袖すり松」の書入れと、門と本堂らしい建物、松の木、があった。また、利休の屋敷や宗鑑屋敷が近くにあった。この図の囲いはこの利休好みの待庵を指しているかと思う。これより前、天正9(1581)年4月7日の「津田宗及日記」に「山崎妙喜庵にて会 道是 及」という茶会がこの利休の待庵であったかもしれないが、しかし言いつたように、秀吉と利休の関わりでできたのなら、このときはまだなかったように思える。

「今井宗久日記」に「天正10(1582)年11月7日於山崎羽柴筑州(秀吉)様御会」とあった。宗及・宗易(利休)・宗久・宗二ら、のちに秀吉の茶道を務めた人たちが客であったが、これも利休の囲いであったとは言い切れない。それは先にあげた宝積寺図に、天正10年11月1日より4日までのこの寺の「本堂後の巖下にスギの庵をかまへ」て秀吉は柴田勝家との和睦のときの使い、前田利家その他4人に自らの手で茶を与えたことが誌されている。「宗久日記」の茶会はその3日後のことであったから、同じく秀吉の宿であり城でもあった宝積寺においてであったと見るのが自然であろう。

この妙喜庵には、そのころ功叔土紡こうしゅくという名のある茶人がいた。秀

吉が妙喜庵で行ったならば、功叔の名が出ていても然るべきであろうと思う。しかし秀吉が宝積寺に宿っていたとき、近くに住んでいた妙喜庵功叔は機嫌を伺うことも、また秀吉が徒然に茶好きな功叔を訪れたことはあったと思う。また、近くに住まっていた利休は、屋敷近くの茶好きな功叔のために囲いを好むことも、また自らのことであろう。

別に江戸時代中ごろの「茶学聞覚事写(吉田常策写)」に、「妙喜庵、利休滅亡後スキヤくずしをく立ル又笠原宗吻立ル」とあるのを読むとき、利休が秀吉の怒りにふれて死んだとき、功叔は利休と関わり深い待庵を一時壊しておくぐらいの慮おもんぼかりは、あるいはしたかもしれない。あるいはまた、利休亡き後、山崎の利休屋敷が毀こぼたれて、その囲いが近くの妙喜庵に移し建てられたのかもしれない。そのとき骨折ったのが笠原宗吻であったのであろう。

いずれにしても、妙喜庵において秀吉との関わりで、囲いと袖摺松とが桃山時代から言いつたられ、また片桐且元のごとき秀吉と深いつながりの人が秀吉の十年忌につくられた寺の図に書き残されていたことは、妙喜庵の「待庵」を利休好みとして取り上げようとする拠り所としてよいであろう。

この囲いは江戸時代に入るとかなり写されて、あちこちに建てられた。そして天正10年の山崎合戦のとき、秀吉が利休に命じてつくらせたものと誌したり、またそれを秀吉が朝鮮征伐の帰りに、名護屋より京都へ上る途中に利休の導きで妙喜庵へ立ち寄った折に大工に申し付けたという話になったのもある。

この囲いは二畳間の隅炉の茶室で、茶室としては一畳大目について小さいもので、このような茶室は利休時代に流行ってきたものであり、利休の弟子山上宗二やまがみそうじの伝えでは、秀吉時代10カ年の間に「上下悉く三帖敷、二帖半敷、二帖敷用也」「貴人か名人か、扱は一物も持たヌ侘数寄か、此外平人ニハ無用也」と述べていた。

待庵二畳茶室[写真4、図1]は、左脇に一畳の勝手が付いた形で、躡口は後のものより大きい。その正面に床があり室床と呼び、壁の入隅に柱を見せず、丸みをつけた塗廻し、天井も同じく塗廻しの土天井。また、床柱は後にスギに替わったが、昔は皮付きの桐、床框も同じで、今も残っている。そこから待庵の名が出たか、月待ちから庵号が決まり、それにちなんで桐が使われたかよくわからないが、



写真4 妙喜庵待庵 西側石置

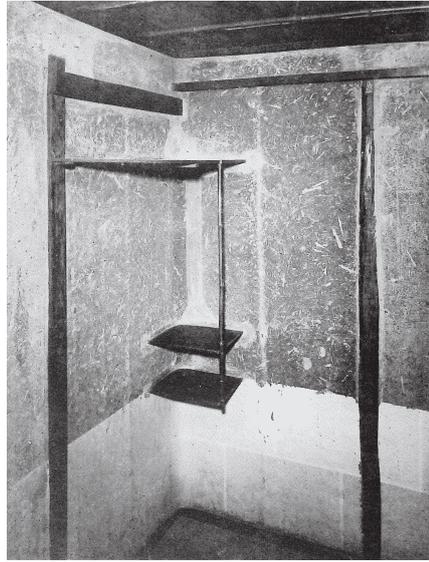


写真5 妙喜庵待庵 勝手隅三重釣棚

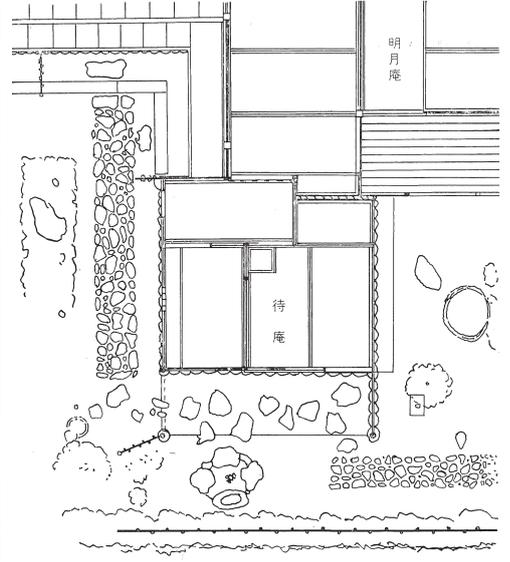


図1 妙喜庵待庵 平面図

式子内親王の「桐の葉もふみわけかたくなりけり 必 人をまつと
なけれと」の歌を利休は好んで露地にも桐を植えたことが伝えられ、
待つと桐は離れないようである。

床脇から続く右の壁に窓が切れ、一つは掛障子、一つは片引き
障子の組み合わせで、竹の骨である。後の色紙窓のもとであろう。
その向かい側には白の太鼓張二枚立てで、次の間に続いている。

床脇左の壁からこの間仕切りに続いて小壁があり、その入隅も塗
廻し壁で、その隅に炉が切られている。その炉は一尺三寸四分余り
で、後の定一尺四寸より少し小さい。

次の間の隅、炉の裏側に竹で釣られた桐板の棚がある。この棚の
壁裏には勝手の三重の釣棚がある[写真5]。この2つの姿はまったく
異なった眺めで、この茶室の空間構成に大きな見どころをつくって
いる。その三重棚に出る入口は一本引き太鼓張戸であって、今は白
であるが、昔は反古張りであったらしい。江戸のはじめに永井信齊
は利休の好みと考へて、その紙の継手まで真似たと伝えられている。

露地は妙喜庵書院落縁の袖垣から始まって、躡口前の飛石に続
く小石の延段がある。手水鉢は昔は芝山鉢と言った四角な銀閣寺
形に似ているが、失われた。

茶人・織田有楽の茶室

如庵（愛知県犬山市）

如庵は昭和46～47（1971～72）年に大磯から愛知県犬山の有楽
苑に移されて仕上がった国宝茶室である[写真6]。如庵は織田有楽
が京都の建仁寺内正伝院に元和4（1618）年ごろつくったもので、
今も元和3年の借地の書付が残っている。有楽は茶は利休の弟子
であって、家柄は織田信秀の十一男で、信長の弟であった。父信秀
は京都から来た公卿を驚かしたほどの茶の湯を行ったことが日記
に見えていたから、有楽は幼いころから茶には親しかったであろう

が、信長が世にあったころはその陰にあったように、あまり名は知
られていない。信長亡き後、豊臣秀吉に仕え、秀吉亡き後には、そ
の子秀頼の叔父として大阪城にあった。大坂冬の陣のとき、徳川家
康と和談が調い、京都に退いた。その隠居所として建仁寺の正伝院
を再興し、そこに仏殿・書院・茶室をつくった。その書院と茶室の
一つ如庵が今にまで残ったのである。これらは明治28（1895）年に
「借座敷有楽館」となり、明治41（1908）年に三井家に売られ、東京
に移った。その後、戦争前に大磯に移ったが、後に名古屋鉄道会社
の手に入り、犬山に移されたのである。その節昔の姿に近いように
できるだけ手を加えて仕上げられた。

如庵は二畳半大目という広さで、異なる形の3種の畳が4枚敷
かれ、床脇と茶立口の上に、斜めに切られた三角形の地板が入った
という間取りで、筋違の数寄屋や袴腰の数寄屋と呼ばれた。また、
向切炉であり、直な中柱が立ち、壁との継ぎに桧板を入れて、櫛形
窓をあけた例のない姿である[写真7]。

躡口の付け方も変わっていて、茶室脇に玄関土間をつくり、それ
に向かって切られている。その土間の正面は繁檜の舞良戸2枚が
昔は立てられて、茶会の折には畳一畳分ほど奥へ立て替えるよう
になっていた。その間を扨徒の間とよんで、置刀掛が据えられ、
脇掛待合の代わりにもなったようである。

その土間の袖壁に丸窓がある。この丸窓は有楽好みのゆえで、昔
からこの壁はそのままだに伝わってきていて、他の壁には洋釘が見え
るが、ここのみ和釘のみである。

この茶室は「曆張席」や「曆亭」と呼ばれ、壁の腰に古い「修繕寺
曆」が貼られていたらしいが、今は江戸時代のものばかりである。
道庫の戸や茶立口の太鼓張襖に淡紅の紙が貼られているが、それ
は修善寺曆の地紙の色に合わせたと伝えられている。

如庵の露地には昔から名高い釜山海の彫銘のある手水鉢が据え
られ、前石には天正7年の彫字が見える。また、隅には元和元年の
有楽の名もある彫銘の井筒が据えられている。

元庵（愛知県犬山市）

如庵の後に新しくつくられた「元庵」（三畳大目）は、有楽が大坂天満屋敷に住まっていたころに好まれたもので、その復元である。今の如庵の屋根妻に掛けてある慶長4（1599）年の板額は、もともとは、この元庵に掛けていたものである。この天満屋敷は大坂落城の後東照宮になって、その中に残っていた茶室の一つで、後に、幾度も火事に遭って建て替えられている。これは東照宮の別当寺九昌院を建国時と名を改めた後の図によったもので、長四畳六畳とが続いている。その前には長四畳がなくて、八畳間になっていたこの三畳大目は、床の間の前が茶立畳になっている変わったもので、後に石州によって写されている。露地には昔3つの名水井戸があって、名が高かった。その一つの「梅の井」が水屋前にあった。

如庵書院（愛知県犬山市）

京都正伝院の書院は、もと香積界こうしゃくかいとよばれた仏殿と庫裡との間に渡り廊下でつながっていた書院座敷で、有楽の隠居座敷となっていたところである。その庭側の床の間付七畳間と次の間六畳はほぼ昔の姿に近く、後ろの四間続きのところは、のちにいろいろ変えられている。これは角柱で、墨絵の張付壁である。狩野山雪の印が

ある襖は八畳と六畳の間仕切りであり、床の間の張付にも狩野家の絵が残っている。

この建物は、昔の図によると板葺屋根のようであったが、今度は柿葺こけら型の銅板葺きにした。後ろのほう（北）の庇のところは、庫裡の板張りに続いていたところで、玄関などはなく、最も変わったところである。前のほうに板縁境は3本溝の敷鴨居で、外側に舞良戸、中に明障子が入っている古い姿もっている。七畳間前の縁には手摺が付き、六畳間前に切石の沓脱石が柱一杯に据えられていて、あまり例のない有楽好みを表している。材料は新しいが、元の図によってなるべく昔の姿に整えたものである。

この書院の南の庭は如庵に続いて、この切石の縁側などが腰掛待合になったのではないかと思える。今、この庭の西のほうには芝生があるが、もとの仏殿のあったところで、その先のほうしょうげたいの嘯月台という唐破風瓦葺きの吹放しの月見台があった。月見台の前に有楽時代には池がつくられ、石橋が掛かり、石の層塔が建てられていた。法心池・無熱橋・具多墳などの名が付けられてあった。犬山においても、それにちなんであり合わせのものを添えてみたが、古い図に表われた復元というものではない。また、有楽の孫の長好が後に好んで建てた長好閣が庭に向かって建っていたが、それはつくらなかった。

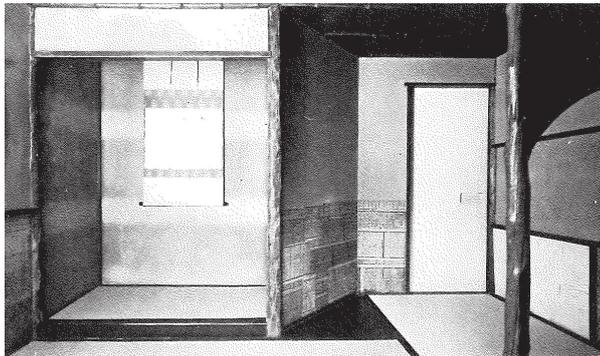


写真6 如庵内部

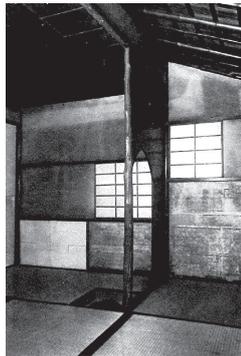


写真7 如庵 炉と中柱

図出典…増田一眞「日本の木造架構史」テキストより

ますだ・かずま

東京工業大学工学部建築学科卒業。松村組、東京大学生産技術研究所（田中研究室）、三井金属を経て、1964年増田建築構造事務所設立。第15回松井源吾賞（勝山館ガイダンス施設）、第7回国土技術開発賞最優秀賞、第1回ものづくり日本大賞（大洲城）、2015年日本建築学会教育賞受賞

自習型認定研修の設問

設問1

庭を通過して茶室に至る通路は石畳でできているが、何と呼ばれているか？

- a. 茶路
- b. 露地
- c. 通路

設問2

茶室の説明のうち、正しいものは次のどれか。

- a. 入口は誰にもわかるように広くとってあり、「茶室御入口」と墨書してある。
- b. 人がやっつくぐれる大きさの扉で、蹴口とよばれるところが正しい入口である。
- c. 入口の扉は普通の引戸で特に目立つことはなく、常連の人は自然に入っている。



認定教材の設問への回答は、CPD情報システムのページ
<https://jaeic-cpd.jp/>
にアクセスのうえ、お願い致します。

※不正解の場合は、単位に登録できない場合があります。

※自習型教材の選択欄における会誌『建築士』選択項目は、平成28年1月より建築士会員のみの表示項目になります。